

不思議です、古里

園長 小島 澄人

春がもうそこに来ています。新しい年のことを考えながら、卒園する子どもたちとの思い出に浸る、毎年訪れる年度末です。何度繰り返したのか、私には43回目になります。いよいよ3月、最後の月になりました。年長さんには最後の年、大きくなりました。歌が聞こえてきます。お手紙が届きます。けど、まだまだ最後の幼稚園を楽しんで、と願うばかりです。

あちこちから、「わあ!」「すごい!」と、手にとる子どもたち、一方、遠巻きに嫌がる子どももいます。毎年繰り返される光景ですが、幼稚園の池やせせらぎには山から「かえる」が、産卵にやってきます。その数は大変な物で、一体どこに潜んでいるのか、この時期になるとやってきます。水槽で飼う、毎日観察に来るクラス、先日せせらぎの周りを探すクラスを見て、「なにしてるの」と、もうカエルはいませんでした。池の中には、ホース状のゼリーみたいなものに、たくさんの卵があるのを教えてあげました。繰り返される産卵です、何千匹、いやもっと、大きく育ち、またここに帰ってきます。広い山のどこに住み着いているのかわかりませんが、これが自然なのかもしれません。

不思議です。ここ2,3年、故郷を思い出す。スマホで自分の故郷を探してみました。山に覆われた中に家がありました。その下には青々とした広い海が広がっていました。実家には誰も住んでいないので想像はしていました。そんな中、兄弟で故郷の実家をみんなの「いつ行っても使える所」にしようと話が出て集まりました。兄弟11人の声でした。早速、設計図、家具、海までの、山からの道をつくろう、となりました。それは、田舎の高齢者ばかりの人たちにとっては「うれしいこと」だったようで、完成し、スマホで見る、自分が生まれた「故郷」には懐かしいものばかりです。「地球の大掃除」のきっかけは、今から65年ほど前に、私がまだ4,5歳の頃、父親に連れられて「海岸のごみ掃除」をやっていたからです。父親は教師でしたが、休みになると、海岸に打ち上げられた自然のものでないものを拾いあげていました。1人今でいう「環境問題」を意識していたようでした。私も結婚当初、幼かった子どもを連れて里帰り、サザエや魚を釣り上げたことがありました。それから帰っていません。新しい家、どんなになっているのか、まだ住んでいる方が元気なのか、帰りたくなくなりました。

冒頭の「古里」と「故郷」の違いはあまりわかりませんが、生まれて育った園児までの「故郷」、そして小学生時代を過ごした所を「古里」と、区別しています。古里、実は小学生時代を楽しんだ村の名前が「古里」でした。腕白で六年間、楽しかったです。それ以来、都会での生活となり、中学より親との生活はなく、勉学の毎日でした。

カエルと私が故郷に、そんな話になりましたが、卒園する子どもたちにとって幼い時の思い出は人生の中で大きなものとなっていきます。楽しく過ごした幼稚園、それが素敵な思い出となり、節目節目を支えていく力となって欲しい。いつまでも応援し続けます。